

『 考えない人間ではなくて、考える人間になるということ。

人まかせにする人間ではなくて、自分で選ぶ人間になるということ。

これが 人格化の、まず 第一歩なのです。』

（ 渡辺 和子 著「人間としてどう生きるか」(PHP 出版) より）

私達つのがえ保育園の職員は、保育現場に入るにあたり 毎朝 礼拝を行っています。保育者として 子ども達の前に立つために、まず 人として 自分自身の心と向き合い、「私達から出る 言葉や想いや行いが 子ども達に相應しいものでありますように」と共に心を合わせ 神様に祈る ひと時を持っていますが、その際に 自分達の保育観や意識に 気づきや示唆が与えられるための本を選び、毎日 1 節ずつ 皆で読んでいます。聖書、マザーテレサ、三浦綾子、倉橋惣三などの著書、保育の専門書など様々ですが今年度は 渡辺和子さんの言葉を 日々 静かに味わっています。上記は その一節です。9月2日 新しいスタートの朝、私達は この言葉を神様から示され、読み合いました。まさにこれは 幼児教育（保育）に於ける大切な原点です。改めて 保育という仕事の重さと深さを見つめ直し真摯に臨みなさいと 神様から言われている思いがしました。

“人間”とは“人と人の間”に生き合う存在です。人として生まれ、人間として生きる。人と人とが互いに関係を築き合って初めて、人は人間になるのだと言えるのでしょうか。

“性格”は、ひとりひとりが持つ天性のものという捉え方をされることが多いですがそれに比べ“人格”とは 社会に於いて形成される“主体性”であり、様々な環境や経験、関係性などを通して ひとりひとりの品性、人間性として育まれていくものです。

“考える人間” “自分で選ぶ人間”になる。…それは“責任を果たせる人間になる”ということです。責任を果たすためには“愛”が無ければ全うすることができません。愛は 人の心でのみ育まれるものです。注がれなければ 渴いてしまい 飢えてしまう人間が生きる上で、最も必要な たったひとつの 心のエネルギーとも言えるでしょう。人間の 正しい人格形成は、乳幼児期に於ける 温かな愛に満ちた心豊かな環境の中でなされていきます。子ども達が 自分が愛されていることを全身全霊で感じることで、自尊心や自己肯定感、自信や自制心などの自分自身に対するまなざしを養い、そして意欲や希望、生きる力へと繋がります。やがてそれは しっかりとした心の土台となり、人を思いやる優しさ、想像力や協調性、社会性や善悪を考える道徳心を培いながら、温かな人間関係を構築できる揺るがない心の柱、大きな力へと変えられていくのです。先月、皆様の御理解と御協力により頂きました夏休みを利用して行った園内研修でも、子ども達の主体性、人間としての生きる力を育むための、保育者の在り方や 関わりを日頃の自分達の姿を振り返りながら 改めて 確かめ合う機会を与えられ 感謝でした。私達大人は、子どもを評価したり 条件や順位をつけたりする者であってはならない。子ども達の貴い小さな命、目に見えないひとりひとりの心を尊重し、人として真剣にぶつかり合うこと、喜怒哀楽を ちゃんと表わし合う関係を大切にすること、そして常に“ものごとの本質”へ目を向けられる子ども達に育てていきたいと思っています。そのためにも 生命の源である天地を造られた神様を仰ぎながら、この世のすべてに神様の意思があり 意味があること、すべての命は 神様の 大きな御手の中で 愛され必要とされ、共に 生かされている存在であること、生きとし生けるものの中で 唯一、人にのみ“心”が 与えられ そこに神様の切なる御旨と使命が込められていることを祈りつつ繰返し伝えながら、乳幼児期にしかできない心の教育に愛を注いで参ります。「私の 心の思いが 神の御心に かないますように。（詩篇 104：34）」（石田 記）